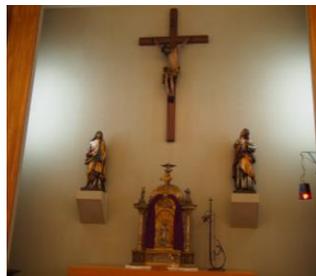


よきおとずれ

カトリック釧路教会だより
〒085-0018 釧路市黒金町 12 丁目 10
第 5 号 2016 年 3 月 27 日復活の主日発行



宮古での出会いを通して・・・

私の机の上に 5 年前の 4 月 4 日に新聞に掲載された一枚の写真がある。「がれきに人を思う」と題されたこの写真は私の中に深く刻み込まれた。がれきが残る岩手県山田町で小雪が舞う中、犠牲者、安否不明者のために合掌して祈りを捧げる一人の若い僧侶(素足にゴム草履)の姿をとらえたものである。宮古を 2 日前に出発し、お経を唱えながら野宿し、釜石(凡そ 30 キロ)を目指している。「がれきの残るところには人の思いが詰まっている。被災者や復興に携わる人たちそして畏怖の念を込めて海にも合掌したい」。当時の被災者数は死亡 12,175 人、安否不明 18,038 人と紙面に載っている。

ところで、私は北見での地震の体験とその時の子供たちとの出会いに背中を押されて、今も宮古との関わりを続けているが、今年も 1 月末の一週間、教区の「札幌カリタスの家」に宿泊して数か所の仮設住宅を訪問した。訪問先で必ず耳にするのは “カリタスさん” という挨拶だ。親しみが込められたこの言葉は 5 年間ほぼ毎週、教区のスタッフの方とボランティアが カフェ・café を開いての変わりから生まれたものだ。現地の人たちにとつ

ヨアキム 川上 剛神父

てはあのカリタス・ジャパンの赤いマークは米屋さんであり、またあるコーヒー専門店の出前として知られていたらしい。(これにはある面白いエピソードがあるが紙面の都合で省かせてもらう)。

宮古では七割の人が仮設から復興住宅に引っ越しを終えていると今回の訪問で聞いた。ところが、仮設住宅でカフェを開いてみると、復興住宅に移った人が居場所を求めてカフェに何人も来ていることが分かり、改めてそれまでの仮設での絆の深さに驚かされた。

地震、大津波という大自然の脅威の前に人間の無力さや小ささを体験から学んだ人同士が生きる時、そこには弱さ、貧しさを土台とし、地縁血縁を超えた連帯感(仲間づくり)が生まれることを改めて教えられた。

聖パウロは「・・・力は弱さのなかでこそ、十分に発揮される」と。また、「・・・体の中ではほかよりも弱く見える部分がかえって大切なのです」(コリント書)とも言っている。まさに、この人たちの絆はこのパウロの言葉を文字通り生きている人々のものであり、そして「貧しい人は幸い、天の国はその

人たちのもの。悲しむ人は幸い、その人は慰められる。あわれみ深い人は幸い、その人はあわれみを受ける」(マタイ5章)、このイエスの宣言が目の前にいる一人ひとりの上にははっきりと示されていることを心から実感し、確信した。このことが、小雪が舞うなか合掌する若い僧侶の思いに共感して「共に生きる」力にこれからなるに違いない。



神様の愛

小さき花のつばき 貫田エミ子

神様が、助けてくださった体験は数えきれない程、ありますが、その中で忘れられないのは、30年以上も前のことです。毎年、10月の末頃になると、なんとなく心が晴れない日が続きます。なぜかという、まず日が暮れるのが早くなり、そして釧路特有のからっ風が吹き、一段と景気が悪くなった中、ああどうやってこの冬を乗り切れるか、どうやって子どもたちを養っていくか、頭の中はそんなことでグルグル。

それでも釧路の夕日は、やっぱりきれいで刻々と沈んでいく、夕日から目を離さずみつめ、やがて海のかなたに消えて見えなくなったら、時計を見、カレンダーを見、あと何日と自分に言い聞かせるのです。それは、冬至が来、クリスマスが来たらしめたもの、寒いのは寒いのですが、毎日少しずつ、日が長くなり確実に春に近づいていくからです。

そんなある日、いつものように夕日をじっとみつめていたら「あの太陽のそばに行ったら熱いだろうね」と口をついて出てしまっていました(多分、疲れていたと思い

ます)。その変な独り言に、一緒に見ていた娘が「神様の愛はあの太陽の熱より、もっともっと熱いんだよ。」と答えてくれました。びっくりした私は思わず「本当？」と叫んでいました。娘は「本当だよ。お母さん、神様の愛はあの太陽の熱より、もっともっと熱いんだよ」とゆっくり繰り返したのです。この時の心の状態をうまく表すことができませんが、神様の愛のすごさをわたしに少しでもわかるようにと教えてくれた出来事でした。

本当に心から神に感謝です。



最近の教会に思う

ニコラオ 中田 文夫

最近、私は体調を崩し、生活のリズムが一変した。緑ヶ岡のみなみ病院の向かいに住んでいた秋口のある日、立ち上がると突然、意識がなくなり、そのまま顔面から床面にうつ伏せに転倒したため強く顔面をこすりつけてしまい、ふた目と見れない形相になった。

ようやくの思いで、妻に抱き起され意識を取り戻し、私には、何やらさっぱり解らずキョトンとして全然、話にならない。そのようなことが二度続き、さすがに二度目には、救急車を要請し労災病院の神経内科を受診した。

病名は「進行性核上性麻痺」という身体が硬直して動かなくなる病で、有効な治療法がないと診断され、家でただボーとしている状態です。それが普通は何でもなく、ひとたび発作が起きると、自分では解らな

くなるから兎も角、妻や周囲の方々は大変である。それに、最近とみに痩せてきたと感じている。

いつまでも、こうしてはいられないと気を取り直し、平日のとある時間帯に聖堂を訪れた。誰もいない静まり返った聖堂、いつもと違った雰囲気の中でしばし黙想していた。先日の雪も除雪され、幼稚園のグラウンドに小高い山と積まれている。園児たちには恰好のすべり台で、歓声を上げながらはしゃいでいる。これも静かな教会と幼稚園のありのままの姿で、これからの園児たちの成長が楽しみである。という思いに駆られながら、ふと我にかえって、祭壇に目を向けると見慣れたはずの祭壇も何かいつもと違って見える、新鮮な気分でもある。祭壇脇の「札幌教区 100 周年の年」とある筆文字も本当に力強く、洗礼後の今日までの自分の姿を振り返ると「神に感謝」という思いも自然に浮かぶ。午後からの当番を担当しているアンナ会の方が私に迷惑にならないように気を遣いながら静かに窓を開け光を入れてくれた。有り難いことである。

最近の教会の姿を振り返ってみると先に川上神父様が述べていたように「教会に来られる人が減少している」と。本当にそう思える。高齢の方が増え、来たくても来られない方、または季節的なのか、とにかく少しずつ減少していることは否めない。

信者の務めは日曜日にミサに与ればよいという義務観念の内にあるのでは、信者と

しての成長もなければ、実も稔らないでしょう。私たちはそのような思いから脱却して一日、僅かなひと時でも良いので、聖堂に足を運んでほしいと願うものだ。私たちの思いが至らないうちは教会の刷新、改善もないと思われる。

古くから日本で言われている言葉「人のいないところに人は寄り付かない」の諺のとおりであると思う。人は閑散としている店で買い物をしようと思わないらしい。

さあ、各位殿、このところに目を向けましょう。私は今、病弱な身になって切に思うところである。キリストに賛美！



聖ファウスティナといつくしみの主日

広報委員会

聖ファウスティナは 1905 年、ポーランドの貧しい農家に生まれ、幼少の頃から農作業の手伝いをして育ちました。子どものころから神秘的な神からの働きかけを受けていた彼女は、1925 年にいつくしみの聖マリア修道会に入会しました。修道院での彼女の仕事は台所、庭の手入れや受付で、特別なことをしたわけではありませんが、内面的にイエスとの深い神秘的交わりへと分け入る恵みを受けました。1931 年 2 月 22 日

聖ファウスティナの前に出現されたイエスのことを日記の中で次のように書いています。「夕方、修室にいた時、白い衣服を着ていらっしやる主イエスを見ました。片方の手は胸のあたりの衣に触れていました。胸のあたりでわずかに開いている衣服の下から、二つの大きな光が出ていましたが、一つは赤く、もう一つは青白い光でした。しばらくして、イエスは「あなたが今見ている通りに絵を描きなさい。そして、その下に『イエス、わたしはあなたに信頼します』という言葉を書き入れなさい。わたしはこの絵が、まずあなたたちの聖堂で、そして、世界の至る所で崇められることを望む。この絵を崇める靈魂は決して滅びないと約束する・・・。」とわたしに言われました。その後、聖ファウスティナは、イエス様から与えられた「神のいつくしみ」の信心を広め、人々が神のいつくしみに信頼するよう導くという使命を忠実に守って生涯を終えました。

2000年4月30日、聖ヨハネ・パウロ2世は、彼女を聖人の列に加えるだけでなく、教会全体のためにご復活の主日の次の日曜日を「神のいつくしみの主日」と定める事によ

編集後記

よきおとずれ発行から1年を迎え、皆様からの投稿に感謝いたしております。

昨年、12月8日から「いつくしみの特別聖年」がはじまり、恵みの年となりました。

「主イエス、あなたに信頼します。」と心から祈り、さげすまれている人、苦しんでいる人、愛されていないと思い込んでいる人にも、いつくしみ深いキリストの無条件の愛の聖心に飛び込んでいくことを恐れないよう祈っていきたいと思います。(S.O)

カトリック釧路教会 〒085-0018 釧路市黒金町12丁目10

TEL 0154-22-5823 FAX0154-22-5832

教会だより 編集：広報委員会

って、この主日に神のいつくしみに対する特別の信心を行うよう望まれました。それは信者たちが聖霊の慰めの賜物を豊かに受け、神への愛と隣人への愛を強め、成長させることが出来るためです。この信心によって、信者たちはそれぞれ自分を反省して、罪の赦しを得た後、兄弟姉妹をすぐに赦すよう促されています。

参考文献

1. ライル：神のいつくしみへの礼拝．聖母の騎士社、2010



聖ファウスティナに現れたイエス

(足元にかかれている言葉が『イエス、わたしはあなたに信頼します』)

*釧路地区の巡礼指定教会である帯広教会根室教会では訪れる方のために巡礼記念カードを用意しています。

(